

第18回 | 平安朝・源平期を経て 鎌倉期までの忍術の変遷



前回は「忍術の原点と孫子の兵法」と題して、奈良朝までの神道文化と仏教文化が混合していた時代背景のもと、忍術が「孫子の兵法」とどう結びつき日本独特の山伏兵法として形成されていったのかを解明し、日本の新しい兵法として発展した歴史を探った。

今回は、平安朝から源平期・鎌倉期までの忍術について触れてみようと思う。

平安朝の忍術の主な特徴は、陰陽思想を取り入れながら、密教との深い関係をもって全国に拡大したことである。平安朝に入って全国に密教寺院が建てられた。密教寺院は、寺院が持つ荘園の確守と密教の発展のため僧兵を擁するようになった。山伏兵法は山伏からこの密教寺院の僧兵に広がっていった。



1 平安朝時代の忍術

(1) 安倍晴明と陰陽道

平安時代の初期から中期にかけて、貴族文化はめざましい発展を遂げた。中国から輸入された易学・天文学・薬学などは、この時期に「陰陽道」として確立された。

陰陽道は平安朝初期から中期にかけて、貴族文化の発展と共に貴族との結びつきを深め、特に密教の大寺院との関係を深めていった。このようにして陰陽道の易学・天文学・薬学

等々の知識が密教寺院によって積極的に取り入れられ、延暦寺・金剛峰寺等は、僧に經典の修得だけではなく、修行鍛錬の一分野として易学・天文学・薬学を学ばせたのである。布教にもこの知識を大いに役立てた。

また、忍術の分野の一つに「察気術」という方術がある。これは気を見て、吉凶禍福を直覚する術である。忍者の中に「陽忍」（表だって忍者と名乗っている者）と「陰忍」（忍者と悟られず陰で動く忍者）などという言葉が使われるのも、陰陽道からの影響である。

この陰陽道を確立したのは安倍晴明(921~1005)である。彼の出自は諸説あり定かではない。母は和泉の人で和泉の国に住む老狐という説もある。これは当時あった靈狐信仰から民衆が言い伝えたものであろう。もちろん伝説であり真実ではない。

安倍晴明は、超能力者でもなく陰陽寮で陰陽師賀茂忠行・保憲より天文学・易学・薬学等々を学んだ普通の学者である。しかし、彼の占いの的中率は密教の高僧の祈祷の効力を上回り、民衆は安倍晴明に厄病退散、病氣平癒を依頼した。これが朝廷に伝わり召し出された。そして、天皇等や貴族の相談やら易学・薬学等知識を使って信頼を得ていった。

この時期の世相が不安定であり、医学・薬学が未だ未発達であったからこそ、いかにも断定的な言葉づかいで人を信用させる能力が優れていた安倍晴明に注目が集まった。そして、

朝廷から天文博士、陰陽頭の官職も賜った。

日本の迷信には陰陽道により創られたものが多い。要するにマインド・コントロールである。貴族社会が崩壊への道を辿る過程で不穏な出来事が多発した。その時に貴族・民衆は民間の陰陽道に縋ったのである。

安倍晴明は、占いをする時はいつも「三尺鬼」と称する三尺の木に鬼を先端につけた棒を使っていたと云われている。三尺鬼は依頼者に対してマインド・コントロールするための道具にすぎない。実際、占いの的中率を高める陰ながらの裏工作をしたのは、忍術をつかう忍者であったのではないかと考えられている。貴族や民衆などの依頼者から占い等の依頼があれば、安倍晴明は事前に依頼者周辺に忍者を放ち、事象、現象を調べさせ、晴明の占い、予言が中るように事前に裏工作していたと考えられる。陰陽師は占いでもって邪気を祓うことを生業としていたので、的中率の如何で大きく収入に差が出る職業である。例えば、依頼により病・災いを訴える家に向いたときは、安倍晴明は瞑目してしばらく心、気を鎮めおもむろに陰陽の占いをする。そして、家人に向かって「この邸の西北の隅に古井戸ありや」と大声で叫ぶと、家人は「あり」と答える。「その井戸の内に金精という鏡が閉じ込められて泣いている。この家の病・災いはその金精の災いのせいじゃ。早速掘り出して

その金精の鏡をとりだし三七日の間、祭られるとよい。災いはかならず退散しよう」と占い予言をしたとする。早速家人は井戸を掘りかえすと、その泥の中から金精の鏡が現れる。

普通、病・災いは三七日もじっと寝ておれば免疫力で治るものである。心理療法で巧みにマインド・コントロールしたのである。晴明が雇っている三尺鬼=忍者が前もって金精の鏡を放りこんでいたのであろう。晴明はかなりの陰の忍者組織をもっていたのではないか。安倍晴明の陰に忍者ありである。奸家心理をキャッチして、まず頭から晴明を崇拜させるコツを心得ていた人物と筆者はみている。当時は医学・薬学・化学も未発達時代である。祈祷も然り何かに縋りたいという心理を巧みに利用したのであろう。

(2) 甲賀族と服部族

甲賀といえば甲賀三郎兼家という武将がいる。兼家が伊賀・甲賀を支配下にしていたのは朱雀天皇の天慶年間(938~946)と云われている。彼は信濃の国司、諏訪左衛門源重頼の三男である。平将門の乱や藤原秀郷の乱で功績を挙げ、乱後甲賀・伊賀の郡司となった。甲賀三郎兼家の実在は史料がなく確証はないが、伊賀の国敢国神社近くの佐那具の地に居館を構えていたと云われている。この敢国神社には甲賀三郎兼家を祀った祠が現存している。また、甲賀と伊賀の郡境に諏訪という集落があり、信濃の国の諏訪明神を祭神とする諏訪大社が、集落の中心部に祀られている。このことからして諏訪氏の出身である甲賀三郎兼家が一族

郎党を引き連れて信濃から甲賀・伊賀へ移住したと思われる。彼の子孫が甲賀に棲みつき、甲賀の忍家と云われているのが、望月家である。

伊賀の服部氏の祖は、聖徳太子を支えた渡来人の秦氏である。京都の太秦はこの秦氏が居住地としていたことから名付けられたと云われている。秦氏は歌唱・舞踊・力技・軽技・奇術・腹話術・人形劇・動物劇等々いろいろな大陸文化を伝えた。これらは日本では今でも神社の祭礼に利用され、百姓の農閑期の娯楽として大いに広まった。伊賀の服部氏は、衣服等を作る呉服部族である。「呉服」部族から服部という氏としての名が生まれたと云われている。伊賀市には今でも呉服、組みひものような小間物が特産品として残っているのが何よりの証拠と考えている。

2 源平期の忍術

(1) 実戦としての忍術

平安末期になって、天下動乱の兆しの中で山伏兵法はより実際の戦闘に使われ始めた。いわゆる鞍馬八流と云われた忍術である。兵法・武術・忍術が独立した形で分離し始めた時期であった。源義経が鞍馬山でこの鞍馬八流を学び修行している。京の五条大橋(現在ある五条大橋ではなく、実際はすこし下流に架かる松原橋と云われている)での弁慶との対決はあまりにも有名な話である。鞍馬八流という忍術は伊賀・甲賀の地侍に引き継がれていった。

源平合戦における義経の武将と

しての戦い方は、この鞍馬八流という忍術が根底にある。この忍術の流儀は身軽に「飛び回る」事が主眼に置かれている。すなわち跳躍術が武技の基本となっている。事実義経は跳躍と奇兵(不意を討つ戦法。これに対する語は正兵)を得意とした。

壇ノ浦合戦では、20キロという大鎧を身に着けたまま八艘跳びの妙技を見せて、敵の大將平知盛を追い詰めた。また、一ノ谷の合戦では、鹿も通らぬ険路からの攻撃を強行し、ヒヨドリ越えの合戦と歴史上云われている腰も竦む絶壁の上から騎馬での逆落としを成功させ、平家を奇兵作戦で攻撃し、屋島へと敗走させた。

少し話は逸れるが、兄頼朝は源義経が平家を滅亡させたという功績があったにも関わらず、義経に対して追討命令を下している。最後は平泉の藤原泰時に攻めさせ自刃させた。

現代では歌舞伎等の題材にもなり、全国各地で上演されている。この兄弟の亀裂の原因を作ったのが義経軍の軍師役であった梶原景時と云われている。それはなぜか。源義経と梶原景時とは戦略の根本的な考え方がまったく相違していたからである。その違いとは、まず義経は鞍馬山という鞍馬八流を生んだという忍術的で奇想天外な修験道の本山ともいべき風土で育っており、勝って相手を倒すことのためには手段を選ばないという実戦的でタイミングを逃さない思考尺度を持っていた。これに対して梶原景時は、根っからの関東の坂東武者である。武将という者はお互い名乗りをあげ正々堂々と一騎打ちでの命のやり取りで勝負を決



平安朝・源平期を経て鎌倉期までの忍術の変遷

する。奇襲などは邪道であり、お互いの誇りを大切にするという正兵をもって戦うという思考尺度を持っていた。従ってお互い、戦いのたびに戦略面（ことごと）で悉く対立をしていたのである。この状況を景時は逐一頼朝に対して報告を怠らなかつた。これに対して義経は頼朝に報告もせず結果的に真逆の行動をとっていたのである。義経は報連相より結果でもって頼朝に認められようとした。これは結果的に義経に不幸をもたらした。この時、頼朝はすでに戦後の武家政権確立の構想（かかわ）を考えていたにも拘らず、義経は目の前の敵を倒すことに専念し過ぎた。ここに頼朝と義経の間を取り持つ武将がいたとしたら戦後の状況はかなり違っていただろう。義経にはこの戦後処理と戦勝後の武家政治をどのように樹立するのかという将来構想の発想ができなかつた。鞍馬山で修行ばかりしていたのでこの政治判断ができなかつたことは不幸であったとしか言いようがないであろう。これに対し源頼朝としては、梶原景時は平家に従っていたので京の公家の状況をよく知る重要な家臣と看做していた。武家政権の樹立という目標を達成するためには、重要な家臣であったのである。平家滅亡後は、まだ政権が盤石（ばんじゃく）でない幕府にとって、頼朝は義経を我が身や幕府そのものを脅かす不要の人物と判断したのであろう。お互い視る方向が違っていたのである。

(2) 百地氏の台頭

伊賀の国（こののちらほうじろ）、友生村喰代（伊賀上

野市の東南方面）に遠峯山永保寺（えいほうじ）がある。1082年百地氏（ももち）が白河天皇（在位1073～1087・72代天皇）の勅願寺として建立した。宗派は真言宗である。百地氏は伊賀流発祥の地と目される四十九院の友生村一体の国衆である。

百地氏は北面の武士として、一時期朝廷の護衛をしていたので中央政庁ともつながりを持ち、伊賀に強い勢力を持ち始めた。伊賀は古くから服部氏が支配していたが、伊賀の南方面から服部氏の勢力を排除していった。そして赤目四十八滝で伊賀忍術の修練を積んだ。伊賀の北方面を服部氏の支族である藤林氏、伊賀の中央地域は服部氏、伊賀の南方面を百地氏と支配地を分けたのである。藤林・服部・百地を上忍御三家と言った。

また、本題から逸れるが後年、織田信長は、独立国家を形成していた甲賀・伊賀地方の支配に乗り出した。織田信雄（のぶかつ）（織田信長の二男）との戦い「第一次天正伊賀の乱」では、この上忍御三家が協力して信雄軍を奇襲・夜襲等の忍術を駆使して敗走させたことはあまりにも有名な話である。しかし、「第二次天正伊賀の乱」では信長は第一次の8千の兵から5万の兵に増やし甲賀・伊賀の民も含め三万人を皆殺しにした。これにより伊賀・甲賀の忍者は全国に飛散して各戦国大名に召し抱えられたのである。徳川家康は信長には密かに伊賀衆・甲賀衆を召し抱えた。これが本能寺の変後の「神君、伊賀越え」と繋がるのである。

3 鎌倉期の忍術

禅と忍術



鎌倉時代、伊賀・甲賀地域は外部に対して堅く鎖国主義をとり、内政を国衆の合議制としていた。伊賀の国を北の藤林氏、中央を服部氏、南を百地氏と定め、お互い相互不可侵とした。従って、織田信長に攻撃されるまで上忍御三家が治める平和な時間が過ぎて行った。

鎌倉時代の特徴は、中国から「禅」の思想が渡来したことにある。禅は宗教というよりは、その内容は哲学に近い。禅は心の思惟（しゐい）、思念（しねん）の極みに自由自在の仏の世界があると考えた。それに達する方法として心身の鍛錬をする。ある意味古くからある日本の修験道に通じるところがあるのである。禅は「観念の固定化」を忌み嫌うところがあり、忍術も剣術と違い秘伝書という形に囚われないことが忍術の要諦とした。

忍術に禅の思想が入ることによって、観念の固定、または観念への執着を捨て、心、気持ちを常にたおやかに保つこと、先入観をもたず澄んだ心で無の境地に入ることこそ忍術を極める事であると説いている。鎌倉時代の忍術は、戦いもあまりなく自己の心身の鍛錬の様相を色濃く残していた。

〈参考文献〉

「忍術の歴史」 上野市観光協会

「忍者の歴史」 山田雄司 角川選書

(2018.9.12)

OKB総研 特命研究員 三矢 昭夫